

貴重書紹介

原題は、*Su[m]ma de arithmeticā geometriā proportioni [et] proportionalitā.*『算術・幾何・比及び比例総覧』(略称『スムマ』)などと訳されています。15世紀のイタリアで知られていた数学・幾何学を口語であるイタリア語でまとめた数学書です。その中で「複式簿記」について初めて紹介された書物でもあります。そして本書で明らかにされた「複式簿記」の基本構造は、現代の企業も日々利用している記帳技術にそのまま受け継がれています。その意味でパチョーリは「会計の父」とも称されているのです。そしてこの『スムマ』を通じて「複式簿記」はイタリア国内ばかりでなく、他のヨーロッパ諸国、アメリカ、そして明治期の日本でも福澤諭吉により『帳合之法』という書物で「複式簿記」が紹介されました。

『スムマ』は、ヴェネチアのパガニーニという工房で1494年に印刷されました。近代印刷確立前の搖籃期本（インキュナブラ）の1つです。二折版（フォリオ

【folio】全紙を二つ折りにして四ページ分とした大きさ）、全308葉。木版縁飾りや木版画を多数挿入した書物です。本文冒頭の飾り枠は美しく、頭文字Lの中にパチョーリ自身の姿を現しています。また、手サインによる数量表現法「フィンガー・サイン」の木版画も特徴的です。パガニーニにとってこのような木版を挿入する書物は初めての試みで、印刷作業に多くの困難があったと考えられます。

西洋書誌学上、現存する本書は版本約100部といわれ、日本国内で所有が確認されているのは、専修大学図書館を含めてわずか10部ほどにすぎません。そのほとんどが近代になってから改装されています。古い装丁を保持している本学の『スムマ』は、わが国でも最も良好な状態である稀観書であるといえます。



福澤諭吉『帳合之法』
慶應義塾出版局 明治6-7[1873-1874]
A/336.9/B79



手サインによる数量表現法



レカ・パチョーリ『算術・幾何・比及び比例総覧』
Su[m]ma de arithmeticā geometriā proportioni [et] proportionalitā. Venice : Paganinus de Paganinis , 10-20 Nov. 1494 A/411/P12

参考図書

参考図書は図書館に所蔵している本ばかりです。是非 OPAC で検索してみてください。

- 高宮利行『グーテンベルクの謎：活字メディアの誕生とその後』岩波書店, 1998
- 堀川貴司『書誌学入門：古典籍を見る・知る・読む』勉誠出版, 2010
- 佐川美智子[ほか]編『書物の森へ：西洋の初期印刷本と版画』町田市立国際版画美術館, 1996
- S.H.スタインバーグ著、高野彰訳『西洋印刷文化史：グーテンベルクから500年』日本図書館協会, 1985
- スタン・ナイト著；安形麻理訳「西洋活字の歴史：グーテンベルクからウィリアム・モリスへ」慶應義塾大学出版会; 2014
- 小宮山博史『日本語活字ものがたり：草創期の人と書体』誠文堂新光社, 2009
- 印刷史研究会編『本と活字の歴史事典』柏書房, 2000
- ブリュノ・ブラセル著；木村恵一訳『本の歴史』(「知の再発見」双書80)創元社, 1998
- ロベール・マンドレー著；二宮宏之, 長谷川輝夫訳『民衆本の世界：17・18世紀フランスの民衆文化』人文書院, 1988
- 雪嶋宏一「パチョーリとパガニーニ」片岡泰彦編『我がパチョーリ簿記論の軌跡』雄松堂書店, 1998
- 特別展「イタリア・ルネサンスの商人に宛てた賜物(おくりもの)」専修大学図書館, 2002
- [edited by Stephan Füssel] "The Gutenberg Bible" Taschen, c2018

展示案内

●印刷博物館「天文学と印刷」

地動説を提唱したコペルニクスなど、天文学を中心に学問の発展に果たした印刷者の活躍を紹介する企画展示。古今東西の印刷に関する常設展示だけでも見どころたくさん。毎日活版印刷のワークショップを開催しています。

会期：2018年10月20日（土）
～2019年1月20日（日）

アクセス：東京メトロ有楽町線江戸川橋駅より徒歩8分

URL: <https://www.printing-museum.org/exhibition/temporary/181020/>

編集後記

「ぶんこ」3号が刊行されました。前号までとは打って変わり、今回は洋書メインの特集でお届けしました。

専修大学図書館公式 Instagram でも情報発信していますので、フォローをおねがいします。 #senstu_lib

奥付：

専修大学図書館
平成30年11月30日発行
題字：荒川依知

※貴重書のご利用については、「ぶんこ」創刊号をご覧ください。

<https://www.senstu-u.ac.jp/news/20171031-12.html>

P1 …… 特集！グーテンベルク、知っていますか?
P2-3 …… 印刷の歴史あらかると
P4 …… 貴重書紹介、展示案内

特集！グーテンベルク、知っていますか？

15～16世紀、ヨーロッパに大きな社会的変革をもたらした三つの発明として、火薬・羅針盤・活版印刷術が有名です。実際にはいずれも中国伝来のものを改良・実用化したものといわれています。

このうち、活版印刷術を発明したのがヨハネス（ヨハネス）・グーテンベルクです。

「印刷」自体はグーテンベルク以前から行われていましたが、当時、彼の活版印刷術が画期的だったのは、同一の本文を編集、整理、修正することができる、交換可能な部品の原理を作ったことにあります。

今年はグーテンベルク没後550年。今号の「ぶんこ」は彼が発明した活版印刷術にからむ「印刷」特集です。

■42行聖書を見てみよう！

右の写真は本学で所蔵する復刻版42行聖書。42行聖書とは、ヨーロッパで稼動活字を使って始めて印刷された最初の本格的な聖書です。グーテンベルクが印刷したもっとも有名な作品ですが、現存するグーテンベルクの作品のうち、42行聖書より前に印刷されたものとしては、The John Rylands Library が所蔵する

贖宥状（免罪符）があります。

42行聖書は羊皮紙と紙の2種類の印刷本があります。刊行当時、予約注文が当初の見込みを超えたため、158部の予定を180部に増やしたともいわれています。不完全なものも含め世界で48部の聖書が現存しています。日本では慶應義塾大学図書館が所蔵しています。



復刻版42行聖書

A Triptych of illuminated leaves on vellum from the Huntington Library's Gutenberg Bible / with an introduction by Thomas V. Lange. -- Yushodo; 1997 /193/B41

グーテンベルクの活版印刷術

グーテンベルクの42行聖書は643葉あり、4台の印刷機で作られたと考えられています。今のように印刷ボタンでポン！というわけにはいかなかった時代にこんな発明がされました。

鉛合金で1文字ごとの活字を作成。1ページに同じ文字が何回も出てくるため、何セットも作ります。

文章にしたがって1文字ずつ活字をつめていきます（組版）。文章がきちんと一行の高さにそろうようにインテルという活字面のない詰め物も入れます。

1ページ分の組版が出来上がったら試し刷り。ここで出てきたさまざまな間違いを直します（校正）。ペテランでもp,b,u,n,6,9など似ているものを間違えることがあるので慎重に。

■ ゲーテンベルク以前—写本



印刷の流れ あらかると



天 地創造から14世紀中葉に到るまでの人類の歴史を年代順に叙述した歴史書。1420年頃、ロンドンで筆写されたと推定される彩色写本。241葉の全7巻からなる完全写本で、各巻の冒頭ページにはページいっぱいに装飾模様が施されている。

ヒゲデン著 トレビサ訳『ポリクロニコン』
[Polychronicon] / [Ranulf Higden ; tr. by John Trevisa].
[London], [ca. 1420]



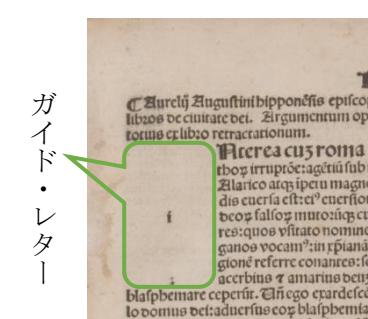
彩 色細密画 14葉を含む時祷書。「時祷書」とは、祈祷文や聖書の詩句、暦などが書かれた本である。キリスト教徒が個人的に用いるために作られた。本書は、フランス南東部を領有していたサヴォワ家の女性が使用したものと見られる。本書はラテン語及びフランス語で綴られ、細密画には受胎告知、埋葬儀礼などが描かれている。

『サヴォワ家の時祷書』 [Book of Hours. Manuscript on vellum. Written in Latin and French. ca. 1450]. [ca. 1450] A/196/B64



東 ローマ皇帝ユスティニアヌス1世が編纂させた「ローマ法大全」を構成するローマ歴代皇帝の勅法の集成『勅法彙集(Codex)』への注解書。バルトルスは14世紀のローマ法学者で、『国際私法の祖』といわれている。赤や青の文字は後で手書きされたもの。下に印刷されている文字は、書く文字を指示するもので、「ガイド・レター」と呼ばれている。

バルトルス『ユスティニアヌス法典注釈書』
Super prima parte Codicis. Venetiis : D. petri Maufer Salici, 31 Jan. 1482.
Bound with the author's "Super secunda parte Codicis" and "Super tribus libris Codicis" A/322.31/B25



アウグスティヌス『神の国』
Augustinus de civitate dei cum commento / Thome Valois et Nicolai Triveth. Venetijs [Venice] : [Bonetus Locatellus], 18 Feb. 1489 [1490] A/132/A96

5 世紀はじめに、護教的立場からかかれたキリスト教の教理書。アウグスティヌスは4~5世紀の神学者、哲学者、聖職者で、「教会の父」といわれている。本書にもガイド・レターは印刷されているが、手書きの装飾は行わっていない。



『1790年ミランの暦書』
Almanach de Milan, ou, Le pêcheur fidèle pour l'an de grace M. D.CC. XC. : observations sur l'année, de la création du monde 5739, de l'incarnation 1790, de la correction Grégor, 206. Arars [i.e. Arras] : Chez la veuve de Michel Nicolas, rue Saint Géry, [1790] /000/Z00/T4240



ニ のチョーサー作品集は、ウィリアム・モリスが理想の書物の制作をめざして設立した私家版印刷所「ケルムスコット・プレス」の第40作目にあたる。バーン=ジョーンズの木版挿絵87点を含み、1896年5月に完成、手漉紙刷425部、ヴェラム(羊皮紙)刷13部が出版された。デザインは木に手で彫られたもだが、その図面は、19世紀のテクノロジーである写真技術を使って版木に転写されたものである。

チョーサー『作品集』ケルムスコット・プレス版
The works of Geoffrey Chaucer, now newly imprinted / ed. by F.S. Ellis. Hammersmith : Kelmscott Press, 1896 A/931/C36

日本で活版印刷は行われていたの?



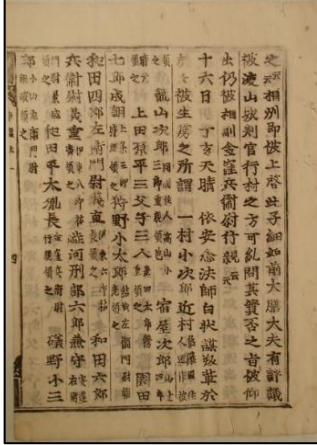
■ 日本における近代以前の活字印刷

日本の板本は、板木を用いて印刷する製版が主流でした。その要因のひとつに、多種多様な漢字や連綿体で書かれる文字、漢文の訓点などを印刷するのに、活字よりも整版の方が印刷しやすかった、という点が挙げられます。しかし、活字による印刷が全く行われなかつたわけではありません。日本における近代以前の活字印刷について、本学所蔵の貴重書を例に見てみましょう。



商 業出版が始まる江戸時代以前は、書物と言えば写本を中心だった。印刷された書物である版本は、有力寺院で經典を私家版ように出版したもののがほとんどであった。写真は、五山(臨済宗の中でも最高の格式を持つ5つの寺院)で刊行された書物である「五山版」の經典。

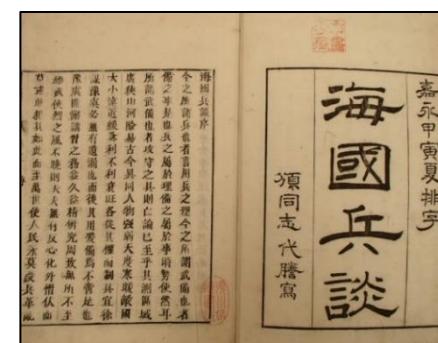
「大藏經綱目指要錄」 [南北朝]刊
(『出版文化: 古版本手鑑』 青裳堂書店, 2012) A/022/Sh99



『東鑑』 [慶長 10(1605)] (『出版文化: 古版本手鑑』 青裳堂書店, 2012) A/022/Sh99

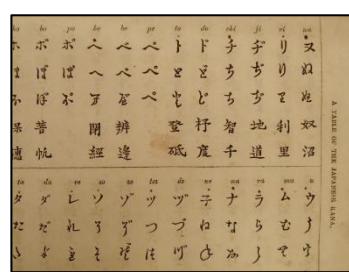


『柏木』 [慶長年間] A/913.3/Mu56



『海國兵談』 嘉永 7[1854] A/399/H48/1~8
林子平著

江 戸時代の出版は整版が主流だったが、江戸時代後期には木製の活字を用いた印刷も行われた。「古活字版」と区別して「近世木活字版」と呼ばれる。活字は刊行に許可を取る必要もなく、また印刷後は活字をばらすことができるので、幕府の禁制に触れるような書物も印刷された。



『明治2年(1869)、元オランダ通詞の本木昌造が、上海の美華書館(キリスト教伝道用出版物の印刷所)の館長であるウィリアム・ギャンブルを招聘した。そこで活字鋳造法と活版印刷術を学んだ本木は、後に「築地体」と呼ばれる平仮名活字を開発し、「日本のゲーテンベルク」と呼ばれた。写真は、ギャンブルが長崎に来る前に印刷した日本語の出版物である、J.C.ヘボン『和英語林集成』。

[A Japanese and English dictionary, with an English and Japanese index] (J.C.ヘボン編訳『和英語林集成』) 慶應 3[1867] A/833/H52

ゲーテンベルクが登場する以前の書物はどのように作られていたのでしょうか。また、活版印刷術発明後の印刷はどのように行われていったのでしょうか。本学の貴重書をいくつか取り上げ、印刷の歴史をのぞいてみたいと思います。

室 町時代末になり、キリスト教版と朝鮮版という2つの新しい印刷物がもたらされる。前者は、キリスト教宣教師が布教と日本語習得のために刊行した出版物で、後者は、豊臣秀吉が行なった朝鮮出兵で略奪してきた書物を指す。これらの影響を受け、寺院以外でも出版が行われるようになり、後の商業出版へと引き継がれた。写真は、徳川家康の命によって刊行された「伏見版」と呼ばれる出版物のうちの『東鑑』。

室 町時代末から江戸時代初期に刊行された活字印刷による書物を「古活字版」と総称する。ここで初めて、仏教関係でも漢詩文ではない書物が出版された。特に、日本の古典文学作品が印刷され、その後の出版物の拠り所となつた。中でも特に有名なのが、本阿弥光悦によって印刷された嵯峨本と呼ばれる書物である。写真は、慶長年間に印刷されたと見られる、『源氏物語』の「柏木」巻。

■ 初期印刷本—インキュナブラ

1450年頃、活版印刷の技術が生まれると、瞬く間にヨーロッパ各地に広がりました。15世紀末までに活版によって印刷された書物は「インキュナブラ」と呼ばれ、特に珍重されています。インキュナブラはしたがって、写本と近代印刷本との中間に位置し、それぞれの要素を併せ持っています。具体的には、活字は写本の書体をまね、イニシャルの装飾や文章の縁飾りも印刷、もしくは手書きによって施され、写本を忠実に再現することをめざしました。また、現代の図書では当たり前となっている標題紙やページ付けもほとんど見られません。

■ 印刷の多様化と大量生産の時代

16世紀に入ると、それまでのインキュナブラとは明らかに異なる近代的な書物が作られるようになりました。その変化が標題紙とページ付けが一般的となることです。また、15世紀は比較的大型の本が多かったのに対し、16世紀には実用的なサイズの本が普及しました。また、植字の時間を短縮するために、活字の数はしだいに減っていました。

印刷物の内容では、使用言語はラテン語が8割近く、内容は聖書や古典が多くを占めていた15世紀に対し、自国語による新たな著作も増えていました。17世紀になると、フランスでは「青本」、イギリスでは「呼び売り本(チャップブック)」と呼ばれる民衆向けの安価な本も登場し、人気を博しました。

その後、18世紀の産業革命を経て書物は大量生産されるようになりました。質より量が重視される風潮を憂い、中世の美しい本を理想として19世紀に再現したのがウィリアム・モリスです。中でもチョーサー『作品集』は世界で最も美麗と呼ばれる書物のひとつです。